

ネットのリスクをどう教えるか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塩田, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028871

第3回

ネットのリスクをどう教えるか

塩田 真吾

はじめに

今日の全体のテーマはリスクですが、私からは「ネットのリスクをどう教えるか」をテーマに、リスク教育の側面からお話ししてみたいと思います。

私は二〇〇九年に静岡大学に着任し、十三年間大学で研究しています。専門分野は教育工学や情報教育、特に情報モラルです。背景にあるのはリスク教育で、リスクをどう教えていくかといったことを研究分野にしています。

† 研究紹介

私の教育工学研究室は、大きく言えば現代的・社会的課題をどう教えるかを大きなテーマとしています。学校教育という点、例えば国語、数学といった教科教育をどう教えていくのかというイメージが強いと思いますが、今、学校教育では、教科教育以外のことを教える必要もあるのです。

例えば、情報通信技術（ICT）、環境問題、キャリアなどの現代的・社会的課題です。そういったものは特に教科書等が決められているわけではなく、教科書に沿って教えていくという形ではないので、そのような分野に関して、どのように効果的に、かつ効率的に教えていくかというところが、大きな研究テーマになります。

その中で、われわれが一番の専門にしているのが、情報モラルです。今、学校では、情報モラル教育が必ず行われています。情報モラルというのは、情報社会で適正に活動するための基となる考え方と態度のことです。平たく言えば、子どもたちがネットやSNSなどの危険に巻き込まれずに、上手にそれらを活用できるようにするためにはどうしたらいいかを研究する学問領域になります。今日は情報モラル、特に情報のリスクについて扱いたいと思います。情報のリスクはさまざまあるわけですが、それをどう伝えていけばいいのか、それが話のメインになります。

従来、ネットのリスクの教え方は、大体がトラブル事例を紹介して「こういう怖いことがあるんだよ。気をつけなさいね」というものでした。これは情報モラルに限らず、リスク教育全体においてそのように教えることが多いのですが、それで本当にリスクに気をつけられるのでしょうか。

ヒューマンエラーはなぜ起こるか

＋思い込み

では早速、皆さんに考えていただきたいと思います。われわれの研究室では、ヒューマンエラー（人によるミス）を研究しています。気をつけようと思っけていても、人のミスというのは起きてしまうものですが、なぜ起きるのか、アイスブレークのクイズをやってみましょう。

日本国内で一番店舗数が多いのは、コンビニか、歯医者か、美容院かと言われたら、どれだと思いますか。まずコンビニから考えてみましょう。増減はありますが、コンビニは国内に約五万六〇〇〇店舗あります。それに対して、歯医者実はコンビニより少し多くて、約七万軒あります。では美容院はどうかというと、皆さん想像がつくでしょうか。約二五万店舗です。美容院は圧倒的に多いので、正解は美容院です。

コンビニか歯医者ではないかと考える方が多いのですが、それは割と当たり前の話で、やはり人というのは、よく見るものを多いと思ってしまう傾向があります。特に、コンビニは街中で目にする回数が多いので、実際の店舗数としても多いのではないかと「思い込み」が生まれてしまうのです。

この「思い込み」というのが、ヒューマンエラーのひとつの要因だといわれています。例えば「自分が楽しい気持ちで送ったら、相手も楽しい気持ちで受け取ってくれるだろう」というのも思い込みですし、「たかさんの人が言っているから正しいだろう」と思っても、実は一つ二つのツイートをみんながリツイートしているだけだったという思い込みもあるので、こういった思い込みというものに着目しながら、われわれはリスク教育を考えています。

SNSをめぐるトラブル

＋トラブルの種類

小・中・高校生を対象とした、SNSをめぐるトラブルは、大きく八つに分けられます（図1）。

一つ目は、悪口・いじりです。コミュニケーションに関するトラブルです。

二つ目は、不適切情報の発信です。悪ふざけの写真やデータの書き込みなどの、SNSでの発信による「炎上」です。ニュースでも「炎上」という言葉をよく聞きます。三つ目は、不適切サイトの閲覧です。性的描写や暴力表

1 悪口・いじり



グループトークでのいじりや無視、短文の意味の取り違いによるケンカ

2 不適切情報の発信



悪ふざけの写真やデマの書き込みなどの SNS での発信による炎上

3 不適切サイトの閲覧



性的描写や暴力表現など青少年にふさわしくないサイトを見て、過度な影響を受ける

4 著作権の侵害



無許可の映像や音楽のアップロードや、違法と知りながらの音楽や映像のダウンロード

5 知らない人との出会い



SNS で知らない人から会うことを求められたり (誘い出し)、自分の画像を送ることを求められる

6 高額課金



たくさんのお金を使って、ゲームのアイテムなどを購入してしまう

7 長時間利用



ゲームや動画、SNS の使い過ぎで体をこわす

8 不正なアプリのインストール



不正なアプリのインストールによる個人情報の流出や遠隔操作による被害

図1 SNSをめぐるトラブルの種類

(出典) LINEみらい財団「楽しいコミュニケーションを考えよう」 URL:<https://line-mirai.org/ja/>

現などを見てしまうということです。

四つ目は、著作権の侵害です。勝手にテレビ番組をアップロードしてしまったり、CD音源をアップロードしてしまったりということがあります。

五つ目は、知らない人との出会いです。

六つ目は、高額課金です。たくさんのお金を使って、ゲームのアイテムなどを購入してしまふことです。

七つ目は、長時間利用、時間の使い過ぎです。

八つ目は、不正なアプリのインストールです。ウイルスに感染してしまうことも含みます。

＋リスクマップ

こういったトラブルのどれが多いのか、特にどれに気をつけなければいけないのかということを考える際に、われわれの研究室では、リスクマップというものを作っています。

従来はトラブルの発生頻度しか見ないことが多く、発生頻度を見て、「トラブルで一番多いのは悪口だ」となるのですが、悪口といっても、本当に些細な悪口から深刻な悪口まで、段階があるのです。そうすると、発生頻度だけ見ていると、トラブルの実態がなかなか分からないということで、われわれは、小・中・高校生六〇〇〇人を対象に、

トラブルの頻度と深刻度を聞いてリスクマップを作りました。深刻度は大・中・小に分けられ、大は生活に大きな影響があったり、犯罪につながったりするもの、中は子どもだけではすぐに解決できないようなトラブルにつながるもの、小は軽微です。発生頻度を縦軸に、深刻度を横軸に、三段階で取ったものをマップ化しています(図2)。

例えば、中学生のリスクマップを見ると、発生頻度も深刻度も高いものは、「スマホやネットを使って勉強や生活に大きな影響が出て自分ではやめられなかった」です。こう回答している人が、中学生の三三・八%います。三人に一人ぐらいは、長時間利用が深刻な問題になっているということ

が分かります。他には、「メッセージのやりとりで『死ぬ』『殺す』などの相手を強く傷付ける言葉を使った」というコミュニケーションの問題、「自分や友だちの住んでいる場所が特定される可能性がある写真や動画を公開した」が上位に来ています。特に、使い過ぎやコミュニケーションは、中学生では深刻度が高く、発生頻度も高いものになるので、注意が必要になってくると思います。

まとめると、特に小・中学生に多いトラブルは、コミュニ

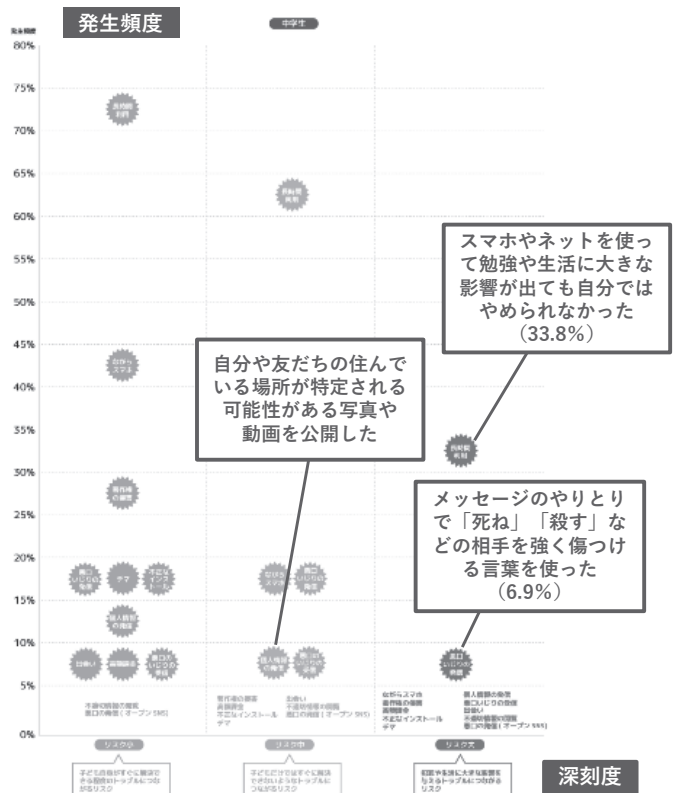


図2 トラブル頻度×深刻度のリスクマップ (中学生)

ニケーションに関するもの、個人情報に関するもの、使い過ぎに関するものになります。発達段階が上がってくると、個人情報に関するトラブルも増えてきます。

情報モラル教育の課題

↑ ありがたい指導方法

では、こういったトラブルをどうやって防いでいけばい

いのでしょうか。従来、子どもたちがどのような情報モラル教育を受けてきたかというところ、トラブル事例をたくさん見せて怖がらせ、「気をつけなさい」と言われるのが一般的で、最もポピュラーなやり方でした。しかし、トラブル事例をたくさん見せて怖がらせるというのは、二つ大きな課題があります。一つは、怖がらせたところで効果が短いことです。私たちもよく自動車の事故の映像をたくさん見せられて、「このような事故があるから、気をつけなさいね」と言われます。その瞬間はすごく怖いと思うのですが、だんだん忘れていってしまいますから、怖がらせたところで効果は短期的なのです。

もう一つは、こちらの方が深刻ですが、トラブル事例をたくさん見せて怖がらせても、「それは自分には起きないだろう」と思ってしまうことです。トラブル事例を起こす人というのは自分よりも愚かな人たちで、まさか自分がそんなトラブルなんて起こさないうちかと思ってしまうのです。トラブル事例をたくさん見せて怖がらせることで、逆に「自分は大丈夫」というバイアスを掛けてしまっている可能性もあるのです。

これは情報モラルだけではなく、他のことにも言えるかと思えます。例えば、振り込め詐欺の事例をたくさん見せて、「振り込め詐欺、怖いですよ。気をつけなさいね」

と言われても、「振り込め詐欺で出てくるような事例は、自分よりも愚かな人たちがやられた事例だから、自分は大丈夫だろう」と思ってしまうのです。同じように、映像教材を見せて、トラブル回避方法について考えさせたとしても、「まあ、主人公みたいなトラブルになんて遭わないだろう」と思ってしまうのです。

十 問題を自分のこととして自覚する

リスク教育の大きなポイントは、「問題を自分のこととして自覚できているのか」ということです。つまり、「自分は大丈夫だろう」と思ってしまうというのが、リスク教育の一番大きな課題なのです。

例えば「ネットで悪口を言わないようにしなさい」「ネットで嫌なことをしないようにしなさい」と言われたとしても、「そんなの当たり前だし、自分は大丈夫だろうな」と思ってしまうのです。親が子どもに伝えるときも、先生が子どもに伝えるときもそうですが、トラブル事例を紹介して「使い過ぎないようにね」「悪口を言わないようにね」と言えば、みんな声をそろえて「はい、自分は大丈夫です。そんなの当たり前です。守ります」と言いますが、それは自分がそんなことをするだろうとは思っていないからなのです。

指導のポイントは、問題を「自分のこと」として自覚させ、

安易な結論を与えず、どのように対応すればよいか、さまざまな状況で考え続けさせる（トレーニングさせる）ことです。

LINE株式会社との共同研究

私の研究室とLINE株式会社は二〇一四年から、リスク教育における、特に情報モラルにおける自覚を促す指導について、ずっと共同研究してきました。この共同研究の成果を皆さんにご紹介しながら、この「自覚」について、試していただきたいと思います。皆さん、考えてみてください。ネット上で「人の嫌なことするなよ」と言われたら、われわれは大人ですし、人の嫌なことなどしないだろうと思うのですが、それは本当でしょうか。

五枚のカード教材を、職場の同僚や友だちからされて嫌な順に、左から並べてみてください（図3）。一枚目が「すぐに返信がない」、二枚目が「なかなか会話が終わらない」、三枚目が「知らないところで自分の話題が出ている」、四枚目が「話をしているときにケータイ・スマホを触っている」、五枚目が「自分が一緒に写っている写真を公開される」です。並べてみて、「ここからは絶対に嫌」というところがあれば、線を引いてみてください。

皆さんの結果を見ると、人によって結構ずれていると思



図3 カード教材を用いて問題を自覚させる

います。当たり前ですが、嫌なこと、特に絶対に嫌なことというのは、人によって違います。嫌なことが人によってく一緒というのはなかなか考えられず、絶対に人によって違ってくるのですが、これをやることによって、実は嫌なことが違うというだけではなく、どういうトラブルが起きる可能性があるかということも、予期することができるようです。このようなカード教材を使うと、二人の間や、その知っている人たちとの間でどういうトラブルが起きそうなのかを考えることができます。

例えば、コニーとジェームズの間で同じような並べ方をしてもらったら、コニーは「自分が一緒に写っている写真を公開される」が絶対に嫌で、ジェームズは「すぐに返信がない」が絶対に嫌で、「自分が一緒に写っている写真を公開される」は嫌ではありませんでした（図4）。ジェームズが、「僕はすぐに返信がないのは絶対に嫌で、自分が一緒に写っている写真を公開されるのが嫌ではないから、コニーもきっと嫌ではないだろう」と思ってしまつと、コ

ニーにとってはそれが一番嫌なことなので、こういうときにトラブルというのは起きやすくなるのです。つまり、嫌なことにズレがある場合が、トラブルが起きやすいときになります。

われわれは、このような形で自覚を促す教材を作成しています。

「カード分類比較法」と言っています。「悪口を言わないようにしなさい」「使い過ぎないようにしなさい」ではなく、カードにしてズレを見ることによって、「もしかしたら、自分も相手にとって嫌なことをしてしまうかもしれないな」と考えることができるのです。

このカードを、ぜひご家庭でもやっていただきたいと思います。自分の親しい人とやってみると、意外とズレが分かって、「私は話をしているときにケータイ・スマホを触っ



図4 教材を用いてズレを自覚させる

ているのは別にどうでもよかったけど、この人はすごく嫌なんだ」ということに気づくのです。それがトラブルへの自覚というものになります。

他にも、例えば「不適切な写真を公開しない」という指導でも、「不適切な写真とは何か」ということがズレやすいです。つまり、私これを不適切ではないと思っても、友だちはそれを不適切だと思うかもしれないし、私と友だちはそれを不適切ではないと思っても、社会がそれを不適切だと思えば、炎上につながるわけです。「不適切な写真を公開しない」という指導ではなく、「不適切な写真とは何か」ということを考え、そのズレを確かめておく、それにもカード分類比較法が使えます。

＋指導のポイント

先ほど、コニーとジェームズにトラブルが起きる可能性があるという話をしましたが、従来、学校教育では、「自分がされて嫌なことは相手にもしないようにしよう」と言われてきました。皆さんも多分、言われたり、言ってきたりしたのではないかと思います。われわれの分野からいうと、自分がされて嫌なことは相手にもしないというのは、結構危うい指導なのです。この背景にあるのは、「自分がされて嫌なことを相手がされて嫌なことは同じだろう」と

いう認識ですが、そのような思い込みがあると、コニーとジェームズのようなトラブルが起きやすくなるわけです。

「自分がされて嫌なことは相手にもしない」というのは、自分がされて嫌なことと、相手がされて嫌なことが同じだろうという思い込みを強化してしまうので、それよりも、「自分の嫌なことと相手がされて嫌なことは違うのだ」ということを認識させておく、これがコミュニケーションラブルを防ぐための大きなポイントかと思っています。ここでは自覚を促す指導というのを、ぜひ押さえていただきたいと思っています。

このような教材は、学校関係者や家庭でも使えるように、無料でダウンロードできるようになっています。「楽しいコミュニケーションを考えよう」「SNSノート」で調べていただくと、私どもの研究室のホームページや、LINEみらい財団のホームページからダウンロードできるので、もし誰かに指導する場合には、ご活用いただければと思います。

情報セキュリティ教育の課題

次は情報セキュリティです。情報セキュリティ教育ではよく、「あやしいサイト、あやしいアプリに気をつけましょ

う」ということが言われます。しかし、これをよく考えてみると、あやしいサイトやあやしいアプリに気づくことができれば気をつけられるわけで、少し矛盾しています。むしろ、あやしいサイトやあやしいアプリが分からないから、気をつけられないのです。皆さんは、あやしさを見抜くことができるでしょうか。

＋指導例

スマホの画面が描かれた七枚のカードをご覧いただきたい、それぞれあやしいかあやしくないか、あやしいと思えば、どこがあやしいのかということも含めて考えていただきます。

一つ目、「ゆうや」という人から、「久しぶりー！ フォローよろしく！ あとこの動画メチャおもろいよ」というメッセージと共にURLが送られてきました(図5)。こういった迷惑メッセージは、下の名前を表示することによって知り合いを装い、「もしかしたら鈴木ゆうやさんかな」「斉藤ゆうやさんかな」と思わせまます。こういったもので特に注意が必要になるのは、リンク先が載っているものです。もしかしたら、本当の鈴木ゆうやさんや斉藤ゆうやさんかもしれません、リンクが載っていたら「これはちよつとあやしいかな」とまず疑うことが先決になりま

す。もしかしたら、本当に面白い動画につながるかもしれませんが、一方で、架空請求サイトなど全然違うサイトにつながるかもしれないので、そういったものにぜひ気を付けていただきたいと思います。ということで、これはあやしいと考えていいでしょう。

二つ目は、「お使いのiphoneは、データ容量がいっぱい

です。OKを押して最適化してください」というポップアップです(図6)。スマホを見ていて、ぼんつと出てくるものをポップアップといいます。データ容量がいっぱい

です。「ウイルスが見つかりました」「今すぐスキキャンしてください」などが出てきたら、「これはちょっとあやしいな」と考えることがポイントになります。これでOKを押してしまうと、勝手にアプリのインストール画面や、違うウェブサイトにアクセスしてしまうかもしれません。

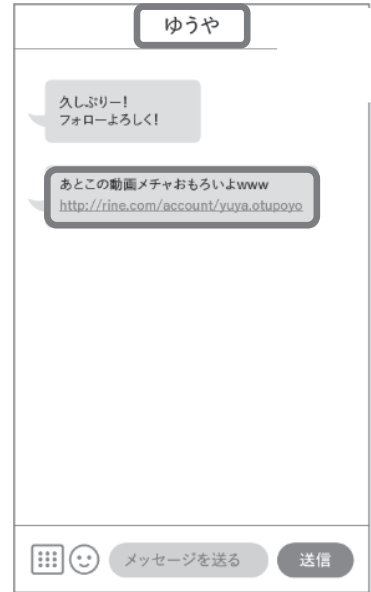


図5 情報セキュリティ教育の指導例1
迷惑メッセージ



図6 情報セキュリティ教育の指導例2
ポップアップ

こういったものを見抜く際に、一つポイントがあります。正規の表現かどうかを考えることが大切です。例えば、これを見ていただくと「お使いのiphoneは」と書いてあります。この「iphone」という表記が、本当はこの表記でないのが分かりますか。正規の表現では「iPhone」となりDは大文字です。本当にiPhoneのOS (Operating System) 側が出しているのであれば、この表現を間違えることはない

ので、表現が違うことも判断基準の一つになります。

三つ目は、古いアプリのインストール画面です(図7)。アプリのインストールで見るときポイントには三つあります。まずはレビューや評価の数です。どれぐらいの人が使っていて、どれぐらいの人が、どんな感想を述べているかをチェックする必要があります。二つ目は最終更新日です。アプリ自体が古いのか新しいのか、更新していないという

ことは、それだけセキュリティ対策等もされていないということになるので、あまりにも古いものは注意が必要です。三つ目はアクセス許可です。この表示はOSによって変わるのですが、スマホのどの情報にアクセスしようとしているのかです。この場合は、位置情報と電話帳へのアクセスを求めています。なぜ占いのアプリなのに、位置情報や電話帳が必要なのかということを考えてみて、最終更新日も二〇一六年とやや古いと考えると、「ちょっとあやしいかもな」と考えていただく方がいい気がします。

レビューも高ければ必ずいいというわけではなく、高過ぎてサクラの人、わざと書いている、うそを書いている人がいるかもしれないということも踏まえて判断します。レビュー、最終更新日、アクセス許可を総合的に判断するのがいいと思います。



図7 情報セキュリティ教育の指導例3 アプリのインストール

四つ目は、激安ブランド財布の通販の販売画面です(図8)。まずは誰が売っているのか、企業の人なのか、一般人なのかということと、出品者からのコメントに、日本語を母語とする話者であればしなないであろう表現を見つけることができるかどうか、判断のポイントになります。例えば、この画面のように「早めの売り切れ。丁寧包み。お送りします」というのは、あまり日本語では使われない表現です。そう考えると、少しあやしいと思います。

五つ目は、Wi-Fi接続の画面です(図9)。今は、無料でいろいろなところでネットにつながる事ができるので、まずは名前です。この画面では公式のドコモのWi-Fiにつなげようとしているのですが、よく見ると、ネットワーク名が「0065dokomo」と書いてあります。ドコモは、本当は「docomo」ですから、少しあやしいと感じます。



図8 情報セキュリティ教育の指導例4 通販サイト

Wi-Fiのセキュリティ、鍵マークが付いていないことから「ちょっと、どうかな」と考えなくてはいいでしょう。もちろんマークが付いていないからといって絶対にあやしいわけではなく、その先で認証することもあるのですが、一つの判断基準として、名前やセキュリティがきちんとしているかを考えると、この画面は少しあやしいと考えなくてはいいでしょう。

六つ目はアドレスバーのURLが「http」で始まるサイト、七つ目はアドレスバーのURLが「https」で始まっていて、鍵マークが付いているサイトです(図10)。「s」が付いているかどうかは非常に大きなポイントです。「s」はセキュアの「s」で、セキュリティを担保するためのものになっています。httpsの場合は、セキュリティがあるので、第三者がその情報を盗み見ることはなかなかできませんが、セキュリティがないと第三者が盗み見ることもで



図9 情報セキュリティ教育の指導例5
Wi-Fi接続

きてしまうのです。従って、自分の個人情報を入れる場合には、まずhttpsかどうかを確認することが、とても大切になってきます。そうなると、六つ目は少しあやしいと感じられます。相対的に見て、七つ目は比較的あやしくないと考えられるかと思います。

† 指導のポイント

そう考えると、「あやしいサイト、あやしいアプリに気をつけよう」という指導ではなく、そもそもあやしいとは何か、どんな点があやしいのかということを、具体的に検討することが大切になってきます。ただ、セキュリティ会社の人に言わせると、「今はあやしいサイトもほとんどあやしくなくなってきた。あやしいと思わせないような工夫がどんどん進んでいるので、あやしくないサイトのあやしさに関しては、目でチェックすることがなかなかでき



図10 情報セキュリティ教育の指導例6
ウェブサイトのアドレス

ない。そのようなときは、OSをアップデートしたり、ウイルス対策ソフトを入れたりすることが大切だけれども、まずは、目に見えるあやしさを回避する力を付けることが大切だ」とおっしゃっているので、ぜひ目に見えるあやしさを回避しながら、目に見えないあやしさに対応するとういことも意識していただきたいと思います。

ここまで、カード分類比較法で自覚を促すということを話してきました。「〇〇に気をつけなさい」と怖がらせて気をつけさせるのではなく、「自分もやっちゃうかも」「自分もセキュリティに甘くなっちゃうかも」「自分も友だちや知り合いに嫌なことを言っちゃうかも」といった自覚を促す指導をどのようにするかということを、少し具体的にお話ししましたが、リスク教育を考えると、まず自覚というのがとても大切です。自覚がないと行動変容が生まれにくいので、リスク教育はまず自覚だということを押さえていただきたいと思います。

リスクのグラデーション発想

＋リスクの見積りの甘さ

ここからは、リスク教育において、特にネットのリスクを教える際に、自覚の次のステージはどういうものになる

かを考えてみます。

われわれが研究していて、子どもたちのリスク、特にネットリスクのことを考えてみると、次に問題になってくるのはリスクの見積りもりの甘さです。どういうことかというところ、「悪口になるかもしれないけれど、まさかそんなに怒らないうだろう」「不適切な写真かもしれないけれど、まさか炎上はしないだろう」という、「このぐらいは大丈夫だろう」という発想が結構危ないのです。調査していくと、子どもたちは「何が危険か」というのは結構分かっているのです。つまり、「これをする」と駄目だ」ということはよく分かっているのですが、それが「どのくらい危険か」ということは、結構ズレやすいというか、あまり考えたことがないのです。リスク教育では、「あれが危険だ」「これが危険だ」と言うだけではなく、それがどれぐらいの危険性を持っているのかということを考えさせることが、とても大切な視点になってきます。

＋指導のポイント

もう少し具体的に言うと、われわれは「〇〇しない」という指導をよくしてしまいます。例えば、ネットについては「ネット上で知り合った人と会わない」「写真や動画は公開しない」「冗談やからかいを言わない」と言います。

確かにそのとおりですが、こういった一か0かの発想の指導は何が問題かという点、どのような特徴があったら危険と判断すればよいかという力を育むことができないのです。例えば、「世の中にいる人は全員泥棒だと思いなさい」と言った瞬間に、どのような特徴があったら泥棒だと判断すればよいかという力を育むことはできないわけです。でも、実際にはわれわれは、確かにみんな泥棒になる可能性はあるかもしれませんが、服装、言動、挙動などを見ながら「この人はちょっとあやしいな」と判断しています。ということは、1か0かの指導ではなく、「どのような特徴があったら危険と判断すればよいか」という、危険を予測する力を育む力、さらには「どのような特徴があったら危険と判断すればよいか」という、危険を予測する力を育んでいくことが、自覚の次に大切なポイントだと思います。

指導例

子ども向けの教材を持ってきたので、皆さんと一緒にやってみようと思います。ツイッター(Twitter)のプロ

フィール画面のようなカードが五人分、五枚あります(図11)。ツイッターをやったことがない方がいらっしやるかもしれないので、少し丁寧に説明していきます。ツイッターではいろいろな人と交流することができますが、自分のプロフィールをこのように載せることができます。

この五人はマヤちゃんというアイドルが大好きな人たちで、参加者自身もマヤちゃんが大好きで、同じマヤちゃん大好き同士として、この五人からそれぞれ「マヤちゃんのこと話したいから、あなたの連絡先教えてよ」と言われたときのリスクを考えてもらいます。

一番目の「たいち」は、自分の顔写真を載せていて、「情報大学情報学部二年／今年ハタチです／車持ち／遠くにドライブ行きたい／マヤちゃん大好き」と書いています。フォロワー数は二五〇です。これは、たいち君を慕っている人



図11 カード教材を用いて危険性を考えさせる

が二五〇人いるかと思っただけならば結構です。

二番目の「みさき」は自分の顔を出していません。「情報高校一C↓二A／吹奏楽部／ホルン吹いています／十七才♀／アニメ大好き／マヤちゃん大好き」と書いています。フォロワー数は五八人です。

三番目の「みっち」は子どもの顔写真を載せています。「東京／二児のママ／カフェ店員やっています！／土曜の夜はホームパーティー／マヤちゃん大好き」と書いています。フォロワー数は五四〇人です。

四番目の「ブラウン」は自分の顔を出しています。「IT系／二十七歳／ゲーム実況の動画配信しています／イベント好きの人フォロワーしてね／マヤちゃん大好き」と書いています。フォロワー数は二二一〇人です。

五番目の「ルンたん」は自分の顔ではなく、アニメか何かのイラストを載せています。「情報大卒／アメリカ留学／洋楽／英語教えます／勉強教えてほしい人メッセして／マヤちゃん大好き」と書いています。フォロワー数は三二二人です。

この人には連絡先を教えてもいいと思えばリスク小、この人は少し危ないかなと思えばリスク中、この人には絶対に教えてはいけないと思えば、リスク大に分類していきま

危険なと言ってしまうと、どういう特徴でリスクを判断すればいいかという力を育むことができなくなってしまう。あえてこの五人を三つのリスクに分けるとしたらどう考えられるか、特にどこに着目しながらリスクを考えればいいのかということを念頭に置きながら、分類してみてください。例を図12に示します。

当たり前ですが、「これが正解です」と正解を出すのは、とても難しいです。実際に、中高生がこの五人について、どのようにリスク認知しているかということをご紹介したいと思います。

リスク大だという回答が圧倒的に多いのが、五番の「ルンたん」です。皆さんの回答でも五番はリスク大が多かったです。

「勉強を教えてほしい人はメッセージちょうだい」のような、

リスク小／問題ない	リスク中／ちょっと危険	リスク大／かなり危険
<p>2</p> <p>みさき</p> <p>情報高校一C一A／吹奏楽部／ホルン吹いています ／IT系／アニメが好き／マヤちゃん大好き フォロワー数：58</p>	<p>4</p> <p>ブラウン</p> <p>IT系／27歳／ゲーム実況の動画配信しています ／イベント好きの人フォロワーしてね／マヤちゃん大好き フォロワー数：2,210</p>	<p>1</p> <p>たいち</p> <p>情報大学情報科学部3年／今年19才です／専攻は ／東京の大学から来た／マヤちゃん大好き フォロワー数：250</p>
	<p>5</p> <p>ルンたん</p> <p>情報大学／アメリカ留学／洋楽／英語教えます ／勉強教えてほしい人メッセして／マヤちゃん大好き フォロワー数：32</p>	

図12 「教えてもよい」リスクをグラデーションで考える (上記は例示)

コンタクトを求めてくる文章がプロフィールにある人というのは、かなりあやしく、リスクが高いと認知されます。これは確かにそのとおりで、向こうからコンタクトを求めてくる人というのは、結構リスクが高いですし、注意しなければいけないと思うので、五番は圧倒的にリスクが高いとする方が多いと思います。

中高生が思う次にリスクが高いものはどれか。ここからは結構、分散が大きくなってしまっていますが、比較的次に挙がってきやすいのは、一番の「たいち」や四番の「ブラウン」です。一番はなぜかというところ、「車持ってる」「ドライブ行きたい」などと書いてある人は、リスクが高いと考える子どもたちが多いからです。こういう人に連絡先を教えると、すぐにドライブに誘おうとしてくるということなので、私は「確かに」と思いました。

逆に、リスク小と考えやすいのは三番の「みっち」です。調査して分かってきたのですが、「女性」や「子ども」ということが書いてあるプロフィールは、比較的リスクを低く見積もりがちなのです。特に「二児のママ」などと書いてあると、ついついリスクを低く見積もりがちということが分かりました。

一番揺れるもの、リスク大と判断する人もいれば、リスク小と判断する人もいるのは、四番の「ブラウン」です。

これは、フォロワー数が二二二〇人とかなりの数がいて、ゲーム実況をしているということは、多分ユーザーみたいな人なのでしょう。この人は実際に自分の顔を出していますし、これだけの人に見てもらっているということでは、信頼できるのではないかと考える中高生が結構多いのです。

もちろん、それが一概に間違いというわけではないのですが、「ゲーム実況配信しています」や、三番の二児のママの「カフェ店員やっています」ということを、本当に信用していいのかということがあります。本当にプロフィールどおりなのかということは、やはり教えなくてはいけないのですが、最初からこれを言って、「全部リスクが高いから、全部危ないので気をつけなさい」と言ってしまうと、どこに着目してリスクを判断すればいいかという力を育てることができないので、まずは1か0ではなく、「〇〇しない」という指導だけではなく、リスクをグラデーションで考えさせるような発想での指導を意識していただきたいと思えます。

人権と情報モラル教育

同じようなリスクのグラデーションという発想で考えて

みたいのが、人権と情報モラル教育です。人権教育においても、情報モラルや情報リスクについてはよく話します。人権教育では、「冗談もいじりも悪口も、全部言っちゃいけない」と教わります。しかし、冗談やからかいには、関係性や信頼感を深める役割も当然あるので、すべてが駄目と一概には言えないのです。しかし、絶対に表現してはいけない内容・場所・相手・関係性もあるので、そこは分けて考えなくてはなりません。

十 指導例

われわれがリスクのグラデーションという発想で考える際に、よく挙げるものをご紹介します(図13)。例えばAからEまでのことを思つたとします。Aは「新発売のジュースを飲んで『このジュース、おいしい!』と思つた」、Bは「カフェのランチを食べて『このお店、マズすぎる…』と思つた」、Cは「『ブサイク芸人大集合』というテレビの番組を見て『あの人、学校の先生に似てるな』と思つた」、Dは「たくさん食べる女子を見て、『女性なのにすごいな』と思つた」、Eは「物腰が柔らかい男子を見て、『少しオネエっぽいな』と思つた」。思ってしまうのは一〇〇歩譲って仕方ないとしても、それをどこまで発言していいか、ということを考えなければいけないのです。

つまり、①家族

にLINEで話す

のはいいのか、②

親友にLINEで

話すのはいいの

か、③友だちのグ

ループLINEで

話すのはいいの

か、④鍵付きのツ

イッター(知って

いる人が多く見る

ところ)で話すの

はいいのか、⑤鍵

なしのツイッター

(知らない人もたくさん見ている、広く言えば全世界の人

が見ているところで話すのはいいのか、これを○(大丈夫)、

×(不適切)、△(悩む)で考えていただくということを

よくやります。

当たり前ですが、これもリスクグラデーションですから、

「これが正解です」と挙げることはなかなか難しいのです

が、考える視点を一緒に見てみましょう。従来なら「ネッ

トで、こういうことを書くんじゃないよ」という1か0か

	①家族にLINEで話す	②親友にLINEで話す	③友達のグループLINEで話す	④鍵付きTwitterで話す	⑤鍵なしTwitterで話す
A: 新発売のジュースを飲んで「このジュース、おいしい!」と思つた					
B: カフェのランチを食べて「このお店、マズすぎる…」と思つた					
C: 「ブサイク芸人大集合」というテレビの番組を見て「あの人、学校の先生に似てるな」と思つた					
D: たくさん食べる女子を見て、「女性なのにすごいな」と思つた					
E: 物腰が柔らかい男子を見て、「少しオネエっぽいな」と思つた					

図13 表現する内容・場所・相手・関係性を踏まえて考える

の指導で、全部不適切と言っていたのですが、内容と場所によるのです。

Aから見ていきます。「新発売のジュースを飲んで『このジュース、おいしい！』と思った」のは別にいいですね。それを家族にLINEで話すのも、まあいいでしょう。ポジティブな情報ですし、「おいしい」と言ったら「おいしいよね」と言ってくれるかもしれない。友だちが多いところで、友だちに対して「このジュースおいしいよね」と言ったら、「おいしいよね」「私も飲んだよ」みたいなことを書いてくるかもしれませんが、全部○でいいかというと、鍵なツイッターだけ少し注意が必要です。

「このジュースおいしい」ということを鍵なツイッター、多くの人が見ているところに書くと、どのようなリスクがあるかということを考えてみます。全世界の人が「このジュースおいしいよね」というつぶやきを見たら、当然「私も飲んだよ。おいしい」という肯定的なものもあるかもしれません。一方で「いや、そのジュースはおいしくない」と言ってくる人もいるわけです。さらに言うと、「そんなジュースがおいしいと思うなんて、味覚がおかしいんじゃないの」と批判や否定をしてくる人もいるかもしれません。そういうリスクを考えられるかどうかというのが、ここではすごく大切になってきます。友だちに言うぐらい

なら全然リスクはないのですが、全世界の人に言ったら批判や否定といったことがあるかもしれない、そういうリスクに気づけるかどうかというのが大切になってきます。

次はBです。「このお店、マズすぎると思った」、それは思いますよね。私も、どこかに食べに行つて「マズすぎる」と思うことはありますが、それをどこまで言っているのか。家族や友だちに言うのは、まあいいのではないかと考えられます。家族や友だちぐらいに「あのお店、おいしくないよね」と言うのは、私にもよくある話です。考えなくてはいけないのは、少し人数が多くなってきた友だちのグループLINEや、鍵付きのツイッターです。どのようなリスクがあるかと言うと、「このお店、マズすぎる」と言ったときに、例えば私は今、静岡市に住んでいます。「静岡市の葵区のお店、マズいよね」と大勢の友だちに言ったら、「あのお店、私のお兄さんのお店なんだよね」みたいなことがあるかもしれないのです。

あとは、DやEの「女性なのにすごいな」「おネエっぽいな」という感想です。もちろんこうしたことを思ってしまった方がいいのですが、仮に思ってしまったときに、それを親友にLINEで話すときのリスクをどれだけ想像できるか。つまり、友だちが性的マイノリティの当事者ではないかと考えられるかどうか、そういうリスクを想像で

きるかということがすごく大切になってきます。

従って、1か0かではなく、リスクを想像する練習という意味においても、リスクのグラデーションという考え方はとても大事なのです。逆に言うと、こういうリスクを想像できないのであれば、SNSを使わない方がいいのではないかとも言えるわけです。リスク教育という意味で考えると、このようなリスクを想像する練習をたくさんしておくことが、とても大切なポイントだと思います。そんな教材を、こうやってわれわれは研究しているというご紹介しました。

特別支援教育における情報モラル教育

†特別支援におけるネットトラブルの事例

特別支援教育において情報モラル教育をどう進めるかということも、非常に大事なポイントなので、研究を紹介させていただきます。

特別支援学校でも、特別支援学級でも、ネットトラブルは起きます。例えば、知的障害のある子どもたちは、SNSやウェブサイトから誘引されて金銭的・性的被害を受けてしまうこともありますし、発達系の障害のある子どもたちでは、コミュニケーショントラブルや、ネットゲームの

使い過ぎということもあります。

特に、これから成人年齢の引き下げが行われ、十八歳成人になると、十八歳でクレジットカードを作ることができるようになります。そうなると、高校生が自分でクレジットカードを作って、ネットゲームに課金し続けてしまうことも考えられるので、こういったトラブルをどう防いでいくかということは、特別支援においてもとても大切なのです。

しかし、これまでもコミュニケーション指導は行なっているはずなのに、なぜトラブルがおきるのでしょうか。例えば、「相手に伝わる話し方のポイント」や「相手の話を聴くときのポイント」については、「ゆっくりしたスピードで話すんだよ」「はっきりした声で話すんだよ」「相手の目を見て聞くんだよ」「うなずきながら聞くんだよ」など、これまで皆さんも何かしら指導してきたと思いますし、指導を受けてきたと思います。子どもたちも、小さい頃からこういった指導を受けてきているのです。

では、なぜネットでのトラブルが起きるかというところ、ここがポイントなのですが、こういったリアルでのコミュニケーション指導をネットに援用できるかというと、テキストコミュニケーションでは、こういった知見がすべて使えるわけではないのです。例えば、テキストコミュニケー

ションではゆっくりしたスピードで話すことは難しいです。はつきりした声で話す、相手の目を見て聞く、話すというのも、当たり前ですがチャットではできないわけです。うなずきながらというのは、スタンプで相づちを打つようなことでやることができるような気もするのですが、これまでのコミュニケーション指導の知見の全部が、テキストコミュニケーションに援用できるわけではないということが大切なポイントです。

† ネット版 SST (ソーシャル・スキル・トレーニング)

特別支援学校ではよく、ソーシャル・スキル・トレーニング (SST) というものをやります。ソーシャル・スキル・トレーニングというのは、例えば上手にお願いする、断る、謝る、人と話をするなど、ソーシャルスキルのトレーニングですが、これはどちらかというと、リアル場面のスキルなのです。しかし、それを全部ネットのコミュニケーションに使えるかというと、やはり使えないのではないでしようか。上手に断るにしても、リアル場面で上手に断るスキルと、SNS上で上手に断るスキルとは、やや別なのではないか。そもそも SNS を使って断るのがいいかどうかということも含めて、リアルとネットの上手な断り方を、それぞれ学ばなくてはいけないのではないかということ、

私たちはネット版のソーシャル・スキル・トレーニングの研究もしています。

例えば、SNS で誰かに何かをお願いするときも、対面ならこういうスキルのポイントがあり、ネットで誰かにお願いする際にはこういうスキルのポイントがあるということとを、きちんと子どもに身に付けさせないと、やはりコミュニケーションコントラブルが起きるのではないか。あとは個人情報を守る、知らない人に出会わない、あやしさを見抜くといった、自分を守るスキルを身に付けておくことが、すごく大切ではないかということを研究しています。

† 特別支援向け情報モラル教材

「SNS の『上手なつかいかた』を考えよう」という、ネット版のソーシャル・スキル・トレーニングの教材を特別支援学校、特別支援学級向けに提供しています。例えば「SNS での写真の公開を考えてみよう」「SNS でのコミュニケーションを考えてみよう」など、いろいろなパターンがあり、そういったものを子どもたちにスキルとして学ばせていくような内容になっています。

少し教材をご紹介します。写真編では、「五枚の写真をも、三つのグループにわけてみよう」というワークをします。たくさんの人が見る SNS に公開してもいいのか、決

められた人にだけ送ってもいいの、SNSに公開しない方がいいのかという、グラデーションで考えさせるようなものです（図14）。「一回目にグループにわたる写真は、この五枚」「二回目にグループにわたる写真は、この五枚」という形で、繰り返しトレーニングします。例えば、修学旅行や旅行先で撮った風景の写真は、多くの人が見るSNSに公開してもいいけれども、電話番号が載った写真や、筋トレの成果を撮った裸の写真などは、絶対に載せない方がいいというふうに考えられます。

今は子どもたちがタブレットを持っているので、たくさんの人が見るSNSに公開してもよい写真を撮って、発表してみるようなこともします。



図14 SNSでの写真の公開を考えるワークシート

このような特別支援向けの情報モラル教材を作っているので、ご興味があれば、ぜひ使っていたいただきたいと思います。スキルをトレーニングしていくことがポイントになります。

個人のモラルや不注意だけが問題なのか

リスク教育を考えていくと、どう自覚させていくか、そして考え続けさせる、特にリスクをグラデーションで考え、さらにスキルをトレーニングしていく、こういったところが指導の大きなポイントになるかと思っています。

最後に考えてみたいのは、個人のモラルや不注意だけが問題なのかということです。リスク教育をすると、個人のモラルが問題、不注意が問題だということになるのですが、本当にそれだけでしょいか。

† 「気をつければ」改善されるのか

次の事例を見てください。

「Aさん（三十代女性）は午後八時ごろ、自宅近くのコインランドリー駐車場に駐車し、洗濯物を投入するため鍵を掛けずに車を離れた。約十分後に近くのが

ソリンスタンドに到着した際、USBメモリや携帯電話などが入ったバッグがないことに気づいた。携帯電話には顧客の電話番号が分かる着信履歴が残り、USBメモリには顧客ごとの売り上げに関する資料も入っていた。個人情報を持ち出す際には会社の許可が必要だが、Aさんは十二月の決算に向けて十一月から無許可で持ち出していたという」。

これはよくある話ですが、これを見るとAさんはすごく悪い人ですよ。Aさんはうっかり者で、鍵も掛けずに車を離れて、なおかつ、無許可で勝手に個人情報を持ち出してけしからんと思うのですが、これを読んだ時点でAさんの過失がどれぐらいかということ、皆さんにも考えていただきたいのです。一〇〇%、八〇%、六〇%、四〇%、二〇%のうちどれでしょうか。では、一緒に考えてみましょう。これをぱっと見ると、当たり前ですが、うっかりミスですし、個人情報を勝手に持ち出していたので、Aさんはかなり悪いですよ。過失は少なくとも八〇%〜一〇〇%ぐらいではないかと私も思うのですが、少し見方を変えてみます。

十 背後要因想像法

この問題の背景を少し考えてみたいと思います。Aさんが、この事件を起こしてしまった背景に、①上司、②同僚、③お客さま、④家族、それぞれに対するどのような不満や愚痴が隠されていたのか、四つのシチュエーションカードから二つ選んで、自分で考えてみてください(図15)。これは想像になるので、自分で創作していただいても結構です。

では、一緒に考えてみたいと思います。例えば、①では、持ち出すには会社の許可が必要だけれども、無許可で持ち出してしまったということは、実は許可を取ろうとして上司に言おうとしたのだけれど、上司が全然会社にいないとか、連絡が取れなかった可能性もあります。②では、本当は決算に向けて同僚と仕事を分担していきかけたのですが、同僚は全然仕事をして

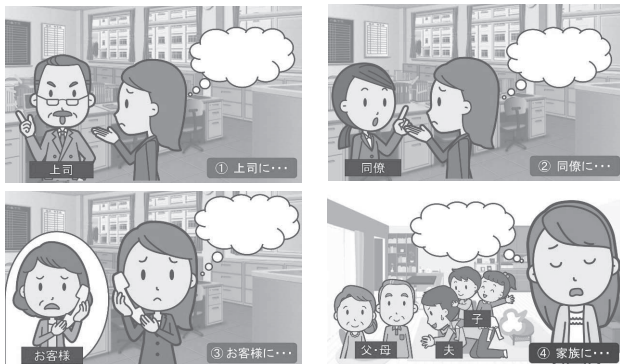


図15 背後要因を考える

くれないし、非協力的で、Aさん自身にかなりの負荷が掛かっていた。③では、決算に向けて資料をまとめなくてはいけない時期に、お客さんからすごいクレームが来て、その対応で手いっぱいになってしまい、家に持ち帰って仕事をせざるを得なかった。④では、本当は家族にいろいろ家事を協力してもらいたかったけれども、家族が協力してくれない、主導でやってくれないということがあって、コインランドリーに行かなければいけなくなったなど、家でもかなりトラブルがあった。

もう一度、そのような視点でこの事例を考えていただくと、もちろんAさんが悪いことは確かなのですが、改善する際に、Aさんが気をつければ次から改善できるかという点、それだけでもないことがわかります。つまり、職場の同僚との関係性、上司との関係性、家族の問題、そういったものが改善されなければ、Aさんがいくら気をつけていても、また同じことが起きるかもしれないわけです。そのように考えてみることを「背後要因想像法」といいます。気をつければ防げるわけではなく、やはり仕事内容、仕事量、職場環境、家庭環境、介護の問題などがあると、たとえ気をつけようとしていても、トラブルが起き続けてしまうのです。

そう考えると、情報モラルも情報セキュリティも、基本

的には個人が気をつけるべきものとして捉えがちですが、決してそれだけではなく、個人がいくら気をつけていても気をつけられない側面があります。どうしてもリスク教育というと、人への教育、人のモラルやセキュリティ意識といったことを改善しがちです。もちろん、それは大切ですが、それだけではなく仕事内容や、環境といったことを変えていかないと、ミスというのは防げないということも、最後に考えていただければと思います。

まとめと今後の研究

リスク教育の分野においては、トラブル事例を紹介して、「気をつけなさい」と言えば気をつけられるわけではないのだということを、皆さんに考えていただくことができたいと思います。特に、自覚やリスクのグラデーション、スキル、さらには個人のモラルや不注意だけが問題ではないということも、意識していただけるといいかと思えます。

われわれの研究室では、こういった研究を日々行っていて、さらに、子ども向けの教材や、子どもだけではなく大人向けの教材なども作っているので、ぜひ一度、そのような教材なども見ていただけるとありがたいです。

最後に、今後の研究は何をするのかということ、今やっている研究をご紹介します。これまでの情報社会（4・0）からSociety 5.0になり、AI（人工知能）がビッグデータを解析しながら進めていく社会、ロボットを使ったりする社会において、リスク教育はどう考えられるのかということとを研究しています。

例えば、自動運転が全盛になったときに、安全教育はどう変わるのかという話があります。つまり、自動運転になつてしまえば、本人がリスクを認知しなくても、自動的に車がリスクを回避してくれます。それは運転者も歩行者もそうです。そうなつてくると、安全教育は必要ないのではないか、必要なくはないのですが、どういう安全教育がそこで必要になつてくるかということがポイントになるのです。

同じようにわれわれ情報の分野でも、例えば、相手を傷付ける言葉を言つたら、AIがあらかじめ削除してくれるとか、AI側が不適切な写真を勝手に削除してくれるような社会になつていつたら、そこで必要なものは何か、そこで必要なモラルとは何かということを、今まさに研究しているところです。これは非常に奥が深い研究で、なかなか難しいところですが、こういったことも今後、必要な研究かと思つたので、このような研究知見を紹介させていた

だくような場があればありがたいと思つています。